

(政務活動費用)

(様式1)

出張報告書

令和4年6月13日

鉏路市議会議長 畑中 優周 様

会派名 市民連合議員団

代表者名 岡田 遼



次のとおり、政務活動費による出張を終えましたので報告します。

受命者	岡田 遼、板谷 昌慶、木村 勇太、宮田 団
出張先	文京区、山形県、遊佐町、酒田市
期間	令和5年6月5日～令和5年6月8日(4日間)
用務	(1) 中高生の秘密基地b-lab(ビーラボ)の取組について (2) 外国クルーズ船のインバウンド及びSKATANTO(さかたん と)について (3) 遊佐町少年議会について (4) 酒田駅前交流拠点ミライニについて
調査(研修) 結果等の概要	別紙参照
備考	

- 注) 1 資料等がある場合、添付すること。資料は、事務局経由で会派へ返却するので、本出張報告書(原本)とともに会派で保管すること。
- 2 調査結果等の概要は、別紙による記載も認める。

会派道外視察 概要報告

市民連合議員団

(会長 岡田 遼)

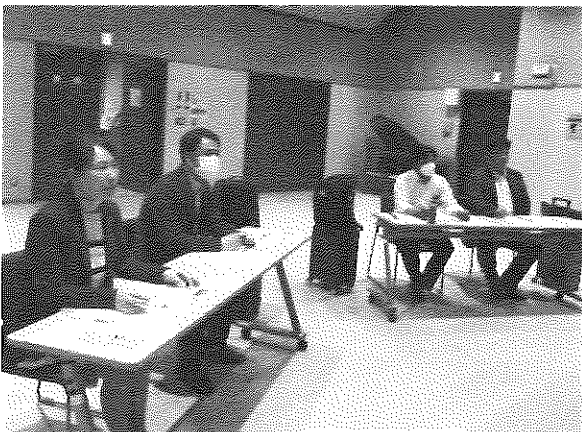
□ 東京都文京区：文京区青少年プラザ (b-lab) 視察

(報告担当：木村 勇太)

市民連合議員団は、2023年6月5日(月)午後3時より、中高生の秘密基地をコンセプトとした文京区青少年プラザ (B-LAB) を訪れました。

東京都文京区では、青少年プラザ (以下 B-LAB とする) を開設しており、現在までの経緯についてお話を頂きました。

まず、B-LAB とは、主として中学生と高校生を対象に自主的な活動の場及び交流の場を提供することにより、青少年の自立性及び社会性を育むための施設となります。開設に至るまでの経緯は、平成13年度文京区青少年問題協議会において「青少年の居場所検討部会報告」「青少年の社会参加検討部会報告」を策定。平成21年10月「(仮称) 青少年プラザ」の設置を計画。平成22年6月28日～7月9日にかけて「中高生アンケート」(区立中学2年生全700名、私立高校3校535名)の実施。平成25年度業務運営委託を行う事業者を公募型プロポーザル方式で選定。また、青少年プラザ条例制定。平成26年7月～PRイベント(音楽、ダンス、学校訪問などのイベント)の実施。平成27年4月青少年プラザ開設に至っている。運営については、委託先となった認定特定非営利活動法人カタリバが行い、委託については、一定の評価の下3年間継続されることとなっている。年間の委託運営費は6000万円となり、その他、光熱水費も区の支払いで行っている。



B-LABの特徴は、中高生の秘密基地がコンセプトとなっており、保護者の利用はなし。カタリバに関わるボランティアスタッフは大学生が中心となっており、親や先生でも、友達でもない。親近感はあるけど少し距離があるちょっと年上の先輩とした位置づけをとっており、ナナメの関係を大切にしている。更に利害関係のない、関係性だからこそ本音がいいやすい安心できる

存在となっている。ボランティアスタッフについては、半年間の期間を定め、期間満了後は全ボランティアスタッフの入れ替えを行い、ボランティアスタッフと中高生が依存しない関係性を保つことや新しい出会いを築くことを大切にしている。B-LABでは、中高生が放課後に来て自由に過ごすことができる、家でも学校でもない第三の居場所であり、①自由な居場所。中高生が自分らしく自由に過ごせる環境を守る。②きっかけに出会う場。中高生が新たな自分の可能性に気づいたり、新たな興味関心を発見したり、様々な仲間と交流するきっかけを用意。③一步踏み出す挑戦のステージ。中高生自身が主役となって、周囲を巻き込み、主体的に取り組む活動を応援。としており、中高生が自主的な活動を通じて自らの可能性を広げ、社会性を身に付けた自立した大人へ成長する場となる。開園時間は、午前9時～午後9時まで（中学生は午後8時まで）となっている。また、来場実績としては、平成27年度からの継続運営で延べ150,000人（2021年8月時点）の中高生が利用。平均利用満足度は、87.7%となっている。

B-LABの利用は、文京区在住、在学、在勤のいずれかに当てはまる中高生世代が対象となっており、次年度に利用を予定している小学校6年生を対象とした体験会や小学校へ訪問を行うなど、中学校へ上がる生徒に対する不安を取り除くための取り組みも行っている。これにより、B-LABを利用する中高生が年々増えている。また、どのように過ごすのかを自らが決められ、誰と何をしてもよく、喋っても何をしなくてもよい。ひとりで過ごしてもいいし、一緒に過ごしてもいいとされている。自ら発信しサークルを作り、一緒に取り組む仲間を募ることもできる。設備は、音楽スタジオ、卓球やバスケットボールが行える会場、ダンスやライブが行えるホール、自習室などがあり、その他にも漫画やボードゲーム等の貸し出し品も完備している。中高生が利用する全施設は、無料で利用が可能とされている。利用している中高生からは、「自分のやってみたくことにチャレンジできる自分のことを好きになれた」「B-LABで失敗できたことがいい経験になった」「自信をもって外でチャレンジできる」などと言った声が聞かれている。保護者によるアンケート結果でも、「毎回たくさんの方々にお声がけいただけでいるようで楽しかったと様子を話してくれます。いつでも自分らしくいられて、他の人に認めてもらえ、より前向きになり、自己肯定感も高まり、自分の居場所を見つけた感じです」「勉強に対して自ら取り組む姿勢が見られるようになった。他学年（特に高校生大学生）がお手本になり、憧れがとても良い影響を受けています。学校では嫌なことも忘れるくらい居場所ができました」など、家



庭内でも変化が見られているようです。

このように中高生にとっての居場所作りが今後の学習意欲の向上、自分自身の能力や才能に気付き、自己肯定感を高めることができ、成功体験や他の仲間からのサポートにより、自身の向上につながります。また、ボランティアとして関わったスタッフについても同様のことが言えます。B-LABは、彼らの未来をより良い方向に導くために欠かせない取り組みであり、たくさんの方々が自ら取り組み、発信する力を養うきっかけになることを学ぶことができました。今後の展望に向け大変良い勉強となる視察となりました。

以上

□ 山形県酒田市

「外航クルーズ船のインバウンド及び交流施設 SAKATANTO」視察報告

(報告担当:板谷 昌慶)

6月7日(水)午前3時から山形県酒田市において、「外航クルーズ船のインバウンドについて」酒田港東ふ頭交流施設「SAKATANTO(サカタント)」を視察しましたので、その概要を報告いたします。SAKATANTOがある酒田港は、最上川の河口に位置し、鳥海山・出羽三山に囲まれ、



庄内平野の要衝にあり、古くから米の産地として知られ、江戸時代に井原西鶴が記した「日本永大蔵」にも米を取り扱う豪商の繁栄ぶりが記されています。

平成5年6月23日に山形県知事を代表とした「プロスパーポートさかたポートセールス協議会」を設立し、外航クルーズ船の誘致を推進するため、平成28年度から協議会内に「外航クルーズ船誘致部会」を設置しクルーズ船誘致に取組み外航クルーズ船寄港隻数を伸ばしてきました。令和5年度は6隻の寄港を予定しており今後のポートセールスも強化していくとのお話がありました。



また、地域観光とも連携し歴史的文化の継承や、鳥海山・飛鳥ジオパークを活用し自然豊かな環境のアピールにも力を入れ、インバウンドの域内循環の向上を目指しています。

また、酒田港東ふ頭交流施設「SAKATANTO サカタント」は、食

と観光の交流拠点として築50年超の港湾倉庫を改装し、6つの飲食店を含む施設としてオープンしました。近年は上屋（うわや）としての利用が少なくなった施設を有効活用し、地域住民や観光客が利用可能な交流施設として新たなにぎわいの場を創出しようと、県がリニューアルを計画。民間事業者の合同会社と契約し運営しています。

休日になると駐車所に止めきれないほどの観光客で賑わっており、今後の展開や外航クルーズ船寄港にスムーズに利用できるような配慮も今後の課題としていました。

酒田港は、平成7年釜山港との定期コンテナ航路が開設され、平成12年7月からは、国際物流ターミナルの供用が開始されました。

平成15年4月「総合静脈物流拠点港」指定、平成22年8月「重点港湾」選定、平成29年「ポート・オブ・ザ・イヤー2016」選定など釧路港と類似した環境体制であり、外航クルーズ船の寄港、また漁港として併せて活用されていますが、釧路港と共通する課題として港施設の老朽化が課題として挙げられます。

酒田港東ふ頭交流施設「SAKATANTO」を視察し、この様な地域交流拠点として上屋を活用し、多くの利用客が見込まれることは、今後の釧路市としても参考



にして、地元や観光客、更にはインバウンドの活用が求められる施設づくりが重要であると考えます。

今回の視察を通じて、様々な角度から多くの意見を聞き、外航クルーズ船のインバウンドを考慮した施設・環境づくりの必要性を引き続き訴えていきたいと思えます。

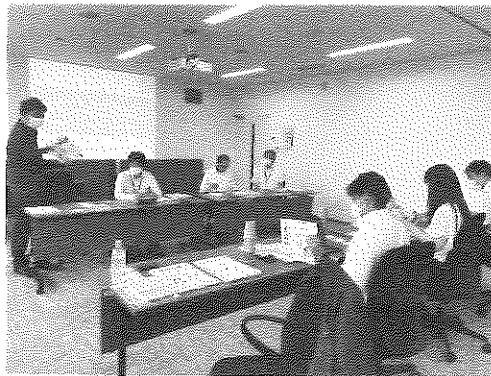
以 上

□山形県遊佐町 「少年議会」 視察報告

(報告担当：岡田 遼)

市民連合議員団は、2023年6月7日(水)午前10時より、遊佐町役場にて少年議会について、遊佐町教育委員会教育課社会教育係 齋藤 浩一 係長、風間 雅文 主事の説明のもと、視察を行いましたので概要を報告します。

遊佐町「少年町長・少年議員公選事業(少年議会事業)」が始まったのは、2003年



で誕生した最大のきっかけは、平成の大合併が行われた社会情勢にあり、当時の遊佐町は人口が減少し、少子高齢化の影響もあり遊佐町を牽引していく若者が減少していった背景があり、その中でこれからのまちづくりをしていくのは若者であるとの訴えかけから、

- ①若者たちが、自らの代表を直接選び、政策を実現していくことで、学校外で民主主義を実際に体験・学習することで社会の構築システムを学ぶ。
 - ②中高生等の未来を担う若者の視点から、調整の提言や意見を町が積極的に採り上げることを通じて、若者の町政参加を促す。
 - ③この事業に関わる全ての関係者が、若者の町政に対する意見に学び、併せて若者たちが、社会システムや民主主義を学ぶ、相互教育の場とする。
- といった狙いのもと事業が始まりました。

少年議会事業の特徴は、政策実現のため、45万円の独自予算が設けられており、対象者は、遊佐町在住の中高生及び遊佐町に通学する高校生で、対象者はだれでも。少年町長及び少年議員の選挙権と投票権をもちます。構成員は少年町長1名、少年議員10名。また、少年町長・少年議員に立候補しなかった者のうちから少年副町長、少年監査、少年事務局長、少年事務局次長が選任されます。

少年議会は年間3回開催され、所信表明や一般質問・政策提言、議会報告が行われます。そのほか政策実現のための全員協議会と呼ばれる会議が10～15回あり、視察研修として少年議会と同じように若者がまちづくりに携わる他団体との交流も行われています。

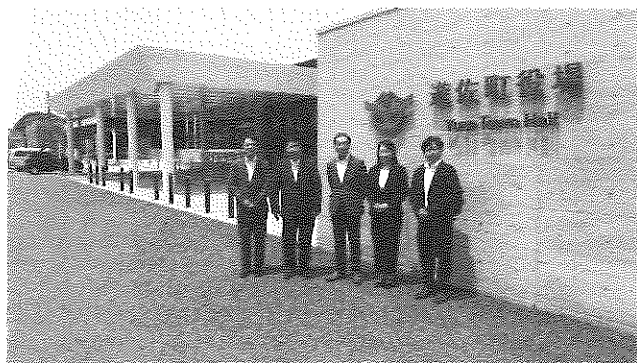
少年議会事業では、これまで、遊佐町のイメージキャラクター「米～ちゃん」が町のシンボルが欲しいという有権者の声から生まれました。また、特産品の開発も行われ、町内のパンやと連携を図り、「芋煮コロッケ」や「もちっと米～カーリー」は実際に販売がされました。さらに、有権者が若者の集まるイベントで町を元気にしたいという思いから「ミュージックフェスティバル」と呼ばれている

音楽イベントを開催し、ポスター・看板などの準備や宣伝活動、当日の司会振興・受付などの運営まで全てを少年議会メンバーで行う企画や、教え合いながら学習できる中高生の居場所づくりとして、生涯学習センターにスタディスペースを開設するといった実績があります。

現在は、21期目となっており、第20回の投票率は85.97%、有権者の意見などを募集するアンケート調査は回収率が80%と関心の高さが伺えます。アンケート調査から要望を集約し、町や関係機関へ要望を行うとのことで、交通の便が悪いのでJRに直接要望を行い、町へも具体的な要望を行なっているそうです。町議会議員とも意見交換を行なっているとのことでまちづくりや行政と深く関わっている印象を受けました。

行政側の業務としては、少年議会に関わる補佐や選挙関係などで、少年議会プロジェクト委員で（選管・議会事務局・企画課・教育委員会などの町職員で構成）選挙公報などを作成する業務も行なっているとのことでした。また、教育課に93万円の予算があり、印刷費や夜間の軽食費、移動するための車の借り上げ料に使用されているそうです。

事業の目的達成のために、議員の主体性を尊重（アドバイスや提案を基本的に行わないようにする。大人が意見を言うと、正しいように感じてしまうため。）することが重要であるということや、各学校等の協力体制として管内の各学校に少年議会の担当の先生を配置していることも口頭で説明を受けました。そのほか、保護者からの協力も必要不可欠（了承を得られずに立候補を断念することや活動が長引き保護者が心配になる。）であることや、少年議会出身者で町議会議員になった方はまだいないということ、少年議会選挙で本物の投票箱を使用することにより経験をされること、投票の結果票数は公表していないこと（人気投票になってしまう可能性や落選者の心情に配慮するため。）、立候補者は女性の方が多く、また、県外留学生も立候補すること、町長や各課の課長、校長などが出席するため少年議会を18時30分から開始すること、地域住民が若者を頼もしく感じるようになったこと、子どもたちが本当の選挙のボランティアとして町内放送で呼びかけることによって、大人としての責任を感じてもらえることなど、様々なことを教えて頂きました。



最後に成果と展望として、少年議会を経験したメンバーは、活動を通して大きな成長を遂げており、町に関心を持つようになり、公金である独自予算を使用しての政策を実現させるため、地道に調査や研究を行い、町当局や外部

団体と協議をする中で、自信と責任感が生まれ、地元の様々な団体の代表や町のイベントの実行委員を務めるなど、地域におけるリーダーが育ち始めているようです。また、2003年より少年議会事業に取り組んできたが、今後も中高生のうちから町政へ参加できる場を大切に、若者の意見を積極的に取り入れ、残りたい町・帰ってきたい町・住みたい町を目指して事業を継続していきたいとのことでした。

選挙権が18歳に引き下げられ、これまで以上に主権者教育の重要性が高まっている中で、釧路市においても、シルバーデモクラシーが進んでいる状況や選挙離れが続いていることから若い人が目を向けてもらえる市政の進め方は大変重要な観点であり、若者の可能性を発揮できる場として今回の視察である少年の議会や若者の議会の創設は、釧路市においてもどのような形にせよ進めていくべきだと考えます。遊佐町の「少年議会」は、市における今後の展望に向けて大変参考となる視察となりました。

以上を報告と致します。

□酒田駅前地区第一種市街地再開発事業 視察報告

(報告者 宮田 団)



「ヒト・モノ・コト・情報が集まり、事業や観光・暮らしなど、新しい活動の拠点に。」をコンセプトに、ホテル、レストラン、マンション、ミライニ（図書館・観光案内所・駐車場・広場・バス停留所）、観光物産館が一体で整備された酒田駅前再開発事業を視察させていただきました。

視察させていただきました。

最初にミライニの研修室にて事業説明を受け、図書館内部、観光案内所、バス停留所、広場、駐車場、マンションとホテルなどの外周を視察しながら説明を受けました。

酒田市では、平成25年12月の駅前民間開発の中止を受け、平成26年度に市が主体となってランドデザインを策定し、平成27年度には、その中で短期整備として位置づけした私有地周辺開発の可能性を調査する対話型市場調査を行いました。この調査結果を踏まえ、「玄関口に相応しい都市空間の創出」、「持続可能なまちづくり」、「市民の早期利用を念頭においた効果的な整備」という考え



から、酒田コミュニケーションポート・現ミライニ（図書館・観光案内所・駐車場・広場・バス停留所）を導入する整備方針を平成29年1月に作成し、整備主体となる事業者募集を開始しました。

ミライニの中核機能となる図書館は、市民説明会では静かな図書館が賑わいにつながるのかという率直な意見もあったが、酒田市

では、これまでの中央図書館の単純な移転ということではなく、民間施設との連携や多様なコミュニケーションを生み出すことで、「ひと」でにぎわう新しい図書館を目指していくという考え計画を進めていったとのことでした。

公共施設の導入については、市民アンケートをもとに市役所内でも議論が交わされ、特に図書館は、手狭になっていることや利用者数が減少傾向にあるという行政課題がある中でも、公共施設では抜群の集客力を持っている施設であったことも導入のきっかけになりました。

ミライニは、人と人をつなぎ、多様なコミュニケーションを創出して、新しい風やパワーを生み続ける拠点であり、未来を築く人財（材）育成・交流支援機能を担うライブラリーセンターとして、多様な読書スタイルの提供やニーズに対応する交流・憩いの空間の提供などにより、様々な人々の交流につなげていくという目標を掲げられています。

図書館は、旧図書館と比較して延べ床面積2.4倍、所蔵数1.2倍、座席数3.3倍で令和元年の年間利用者数24万人から令和5年は40万人の目標を大きく上回り48万人を超え、新規登録者数も各年代増加していますが、特に11～15歳では7.8倍、16～20歳でも5.4倍に増え、41～70歳でも6倍を超えていました。

館内では子どもたちのスペース、学生向けのスペースなど、完全防音室を除き図書館内どこでも自由におしゃべり出来る、リモートワークや会議も出来る環境になっており、図書館内でのイベントも含め多くの市民が来館しておりました。

駅前の賑わい創出に時間をかけ市民と一緒に考え取り組んだ成果が出ていると感じ、釧路市でも市民に愛される公共施設や駅前開発にするために市民と一体感のある進め方を参考に、その取り組みを求めていきたいと思いました。

